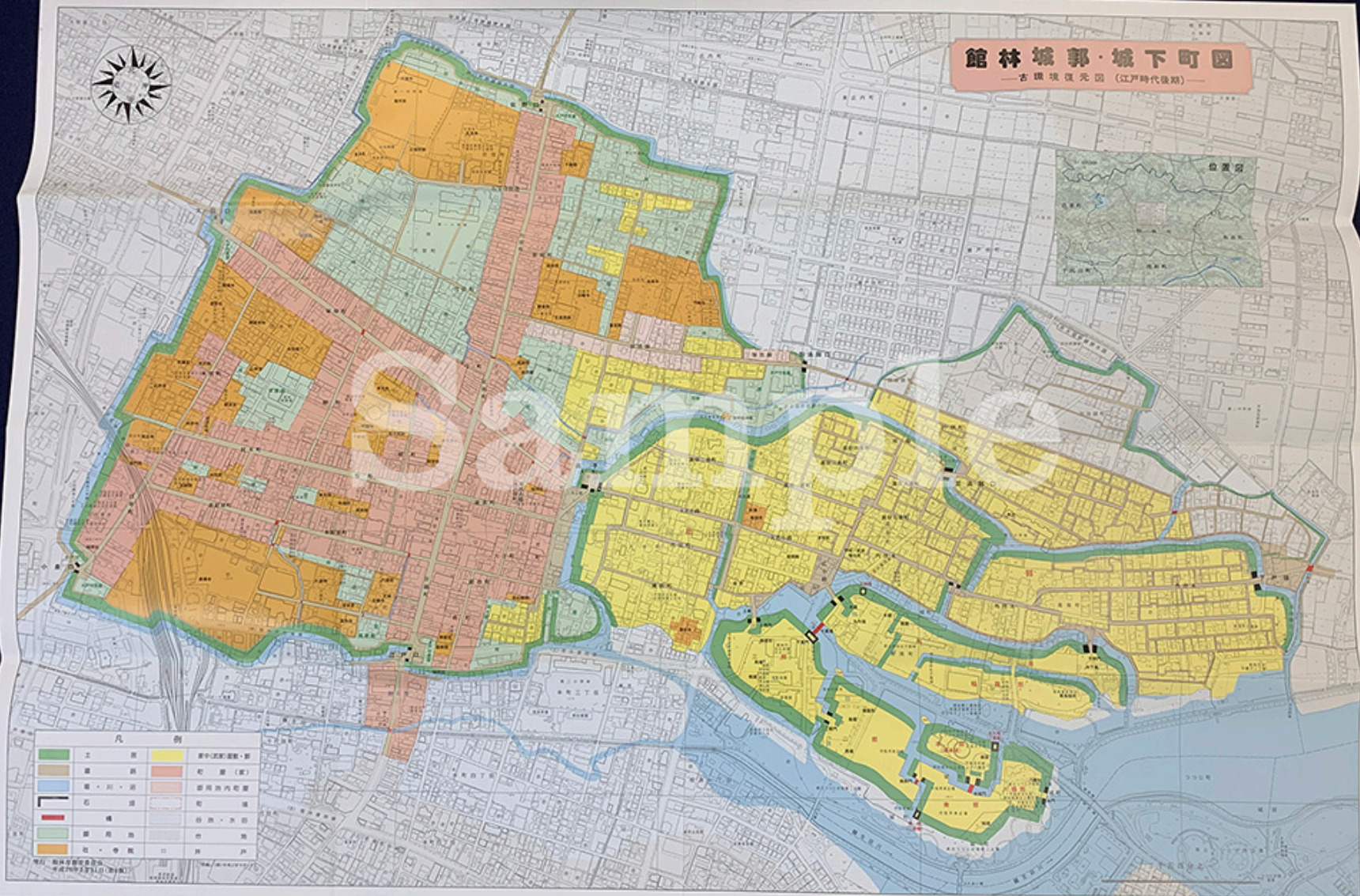
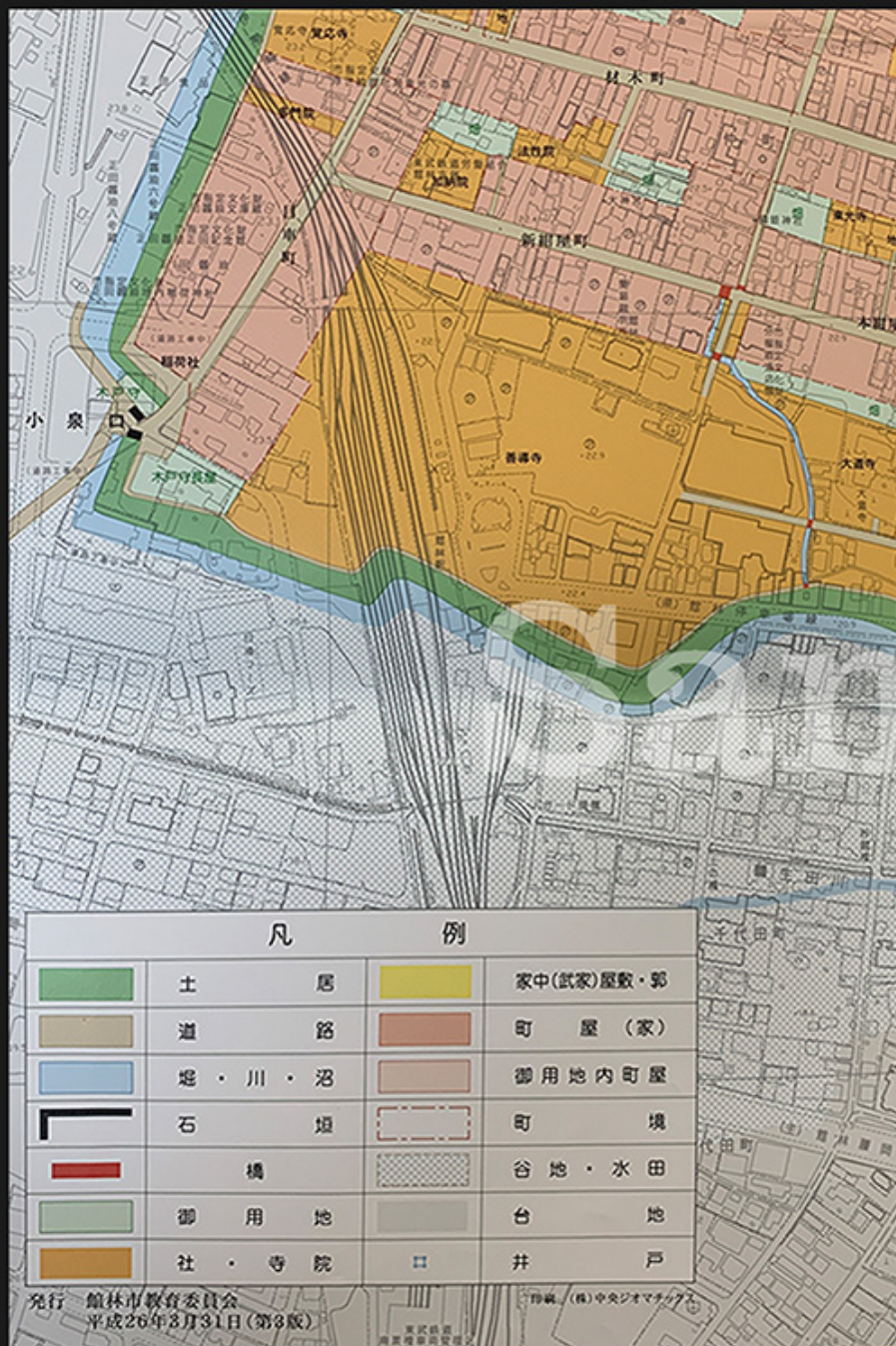


# 館林城郭・城下町図

—古蹟復元図(江戸時代後期)—



▼ 「館林城郭・城下町図」現在の市役所付近

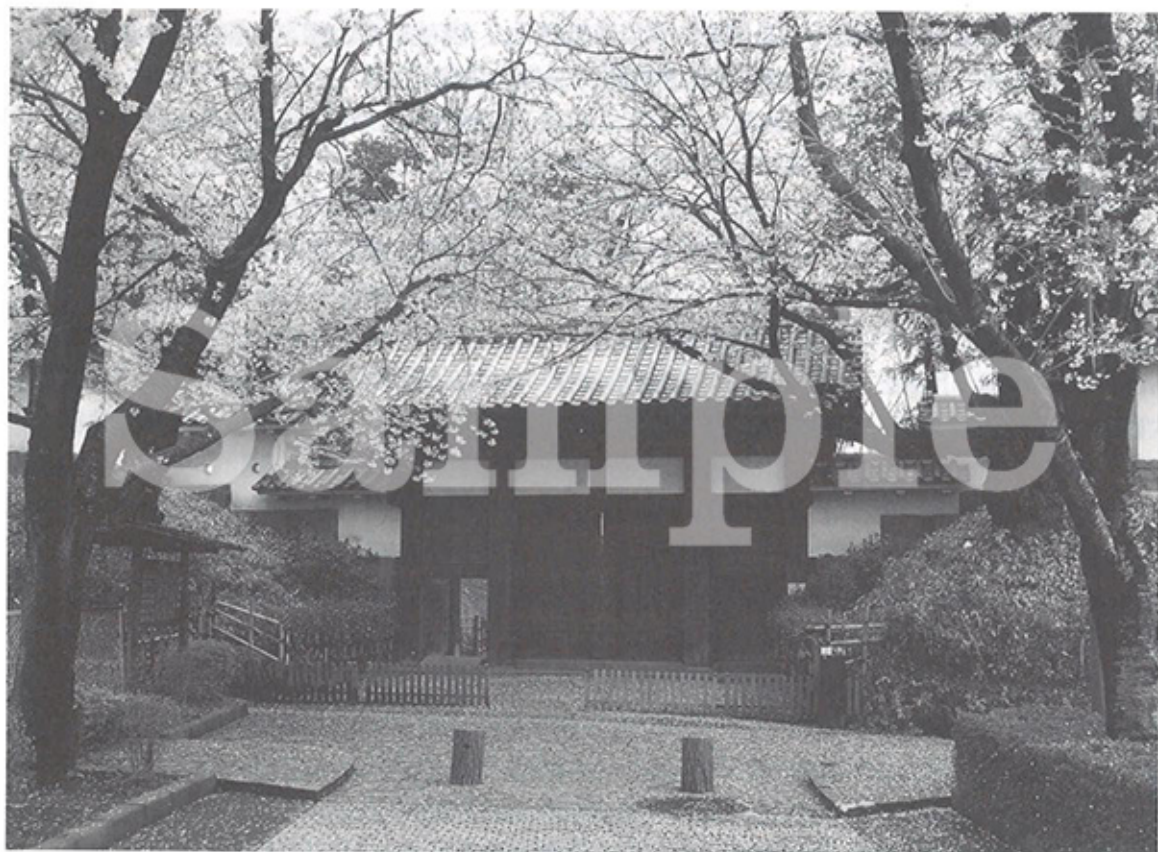


▶ 「館林城郭・城下町図」凡例

文化財総合調査

館林古環境復元図

# 館林城郭・城下町解説書



館林市教育委員会

## 凡 例

1. この復元図は、館林市都市計画図（縮尺1/2500）平成22年度版に、江戸時代末の館林城の城郭ならびに城下町を投影したもので、昭和59年度に発行したものと（平成12年再版）を修正して再版したものである。
2. 復元図作成については、館林市教育委員会文化振興課において次のように行った。
  - (1)現在の館林市土地評価図（縮尺1/2500）に記載されている市街地の地番を集筆することで、土塁・堀割・町割等を割り出し、城郭、城下町部分の範囲を読み取った。
  - (2)土地評価図の地番から読み取れない細部については、城下町部分は嘉永元年（1848）の「館林城下地図」を、城郭部分は秋元時代（幕末）の「館林城絵図」ならびに明治初期の「館林町全図」を参考に復元した。
  - (3)土地評価図上に復元した城郭・城下町部分は、現存する土塁、堀割および地形等を考慮し、同縮尺の館林市都市計画図に投影して復元図とした。
3. 町名および寺院名など各部名称については、城下町部分は嘉永元年の「館林城下地図」、城郭部分は秋元時代の「館林城絵図」を参照した。
4. 鶴生田川と谷地については、現在の地形図および地質図を参考にした。
5. 復元図の彩色については、参考絵図等を尊重し、基礎図である都市計画図と重複して活用できるようにした。
6. 解説書については、下記資料を参考にした。

「館林城下町絵図（延宝2年）」「館林藩家中図（天保7年）」「館林城下地図（嘉永元年）」「上野国館林城絵図 秋元但馬守（嘉永元年）」「館林城絵図（秋元時代）」「町方引渡帳（弘化3年・館林藩史料）」「館林城地目録（浜田会誌第4・5号）」「館林実記（享保13年頃）」「館林記（群馬県史料集第2巻）」「館林市誌・歴史篇」「館林尾曳城誌」「館林城調査報告書第1集 城郭図とその変遷」「館林市史 特別編第2巻 絵図と地図にみる館林」「館林市史 特別編第4巻 館林城と中近世の遺跡」
7. 解説書中の尺貫法の換算は1間を1.8mとした。
8. 附属絵図は、下記の絵図を複製した。

延宝2年（1674）の「館林城下町絵図」（館林市指定重要文化財・青山家蔵）  
嘉永元年（1848）の「館林城下地図」（館林市立資料館蔵）  
秋元時代（幕末）の「館林城絵図」（館林市立資料館蔵）  
徳川綱吉時代の「館林御城図」（国立国会図書館蔵デジタル化資料より）
9. 封筒イラストは「館林城絵馬」（尾曳稲荷神社蔵）を参考に根岸良子氏が作成した。

## 館林城とその変遷

館林市は、群馬県の東南端に位置し、北は渡良瀬川、南を利根川に挟まれた地域の、標高20m前後の低湿地と低台地からなる。

館林城は、現在の市域のほぼ中央に位置し、城沼に突き出した舌状台地上に本丸（本城）、南郭、八幡郭、二の丸（二郭）、三の丸（三郭）の牙城部が設けられた連郭式の平城である。館林城は戦国時代、室町幕府の内乱により抬頭してきた在地武士たちの攻防の拠点として築城され、江戸幕府成立後は、幕府を支える親藩・譜代の大名の居城として存続し、近世城下町として幕末まで繁栄した。

文献史料ではじめて館林城（立林城）の名称が登場するのは文明3年（1471）の時、「松陰私語」「足利成氏書状」「上杉顕定感状」などに見ることができる。当時、関東の在地武士たちは室町幕府に抵抗する古河公方足利成氏と幕府方の関東管領上杉氏との争いに巻き込まれていたが、この頃館林城（立林城）にいたのが「赤井文三・文六」で、当時赤井氏は足利成氏に従っていた。この時、成氏と上杉氏との争いが館林付近にまで及び、館林城には赤井氏とともに成氏の家臣高師久が籠城し、上杉方の武將長尾景信らによって攻撃されたことが上記の文献から知ることができる。

このように、古河公方と上杉氏勢力は関東地方を二分する戦乱を繰り返していったが、次第に在地の守護代が各地で支配力を強め、明応4年（1495）以後相模国小田原城を本拠とした北条氏が次第に南関東を制圧し、その勢力は北関東に迫りつつあった。こうした北条氏の勢力に押された管領上杉憲政は、越後国守護代長尾景虎（のち上杉謙信）に家名と管領職を譲り、永禄3年（1560）に景虎は上杉憲政を擁して上野国に出陣し、北条氏勢力と対するようになった。

この頃、館林城は赤井氏の本拠となっていたが、永禄5年（1562）に上野国に侵攻した上杉謙信によって攻略され、北条方に組していた赤井氏は追放されて館林城は足利城主長尾景長に預けられ、景長は足利から館林城に移った。一方、信濃国を制圧した甲斐国の武田信玄は、北条氏支援を口実に永禄4年（1561）頃から上野国に進入し、上野国内では越後の上杉氏、甲斐の武田氏、相模の北条氏による三つ巴の勢力争いが繰り広げられていった。こうしたなか、永禄12年（1569）に長尾景長が没し、金山城主由良成繁の二男顕長が長尾氏を継いで館林城主となった。その翌年、上杉謙信から武蔵国羽生城主広田直繁に一時館林城を与える内容の記録もあるが、実質的には館林城は長尾氏の居城となっていた。

やがて上杉謙信が没し、武田氏の勢力も弱まると北条氏の勢力が一挙に強まり、天正12年（1584）に北条氏政・氏直は館林城を攻め、翌13年（1585）に長尾氏は北条氏に屈して北条氏政の弟氏規（伊豆荊山城主）の持城となった。

しかし、関東地方をほぼ掌握した北条氏も、天正18年（1590）に豊臣秀吉の東征により北条方の城が次々と秀吉軍に降伏するなか、同年7月の小田原総攻撃により滅亡した。

萬曆九年 館林下地圖



館林御城圖 (1621Wanli 49)



萬曆八年 館林下町給圖 (註林下町及重要文化財)



次給圖 (1614Wanli 40)

